

## 心に正直に 生きる

言うのは簡単だが、実行するのは難しい。そう生きると、肩書や世間の雑音、常識、慣例に必ずぶち当たってしまう。有坂さんの歩みを見ると、それが出来たから実現した業務スタイルなのだと気付く。

有坂——僕たちのような仕事って法人とか団体とかでやっていると思われる。でも実際は僕と順也の2人だけで。普通はこうっていう形があると思うけど、そうじゃない仕事の仕方もあるとあっていて。自分が自分達らしく、気持ちよくいられて、今ある形に自分を当てはめるんでなくて自分のままでいたら今の形になったんです。結果、順也も今はFilmmarksという映画の仕事ができていて。

有坂さんは映画評論家でもない。イベントでもない。インスタグラマーでもないし、映画館の支配人でもない。でも実質は縦横無尽にそのような仕事をしている。

当の本人はというと、さらっと一言「映画ファンが行き過ぎただけ」

有坂——人は楽しいところに集まってくると思っていて。コツコツと、楽しくやっていたら“大丈夫”だと思っています。アルバイトからキノ・イグルーが始まって、その延長で今はキノ・イグルー1本になっている。だから仕事に対して全くストレスがないんです。僕たちはこちらから営業をしたり、Instagramに#をいっぱい付けて宣伝！みたいな感じではなくて。自分たちを知って、一緒にやりたいと言ってくれた人とやっています。だから毎回「よくたどり着いてくれました」と思って。その担当者としてしか出来ない事があると思うので、お話ししながら一つ一つオリジナルのイベントを作ってきました。

この時代珍しい、完全受身スタイル。それならば角度を変えて「選ばなかったことは何か」と聞いてみた。ひとつ思い出したように語ったのは、活動をはじめて2～3年の頃、日本最大級のテーマパークを運営する会社との仕事。

話を聞いた際、最初はウキウキしたが心で“何か違う”と感じるものがあり「大きい仕事」と「心の違和感」の葛藤の末、断ったという。言葉にできない“何か”の正体はきっとキノ・イグルーらしさなのだろう。

とはいえ、待っているだけでは仕事は生まれなし、何より誰かの心の映画スイッチが押せない。素敵な映画たちが見られる機会がなくなってしまう。だから、SNS発信の他にも能動的に続けている活動がある。

2021年4月時点で50回目になる企画「あなたのために映画をえらびます。」がそれだ。

このイベントは1対1で参加者と1時間ほどかけて向き合い、好きな色や行ったことのある国などを聞きながら、最終的にその人に合った5本の映画をセレクトするという試み。映画ソムリエのようなこの企画にはルールがある。

有坂——お母さんが申し込む場合、お子様を連れて来ていただくのは断っているんです。「母」の肩書を外したその人と向き合いたいから。子どもが近くにいると「～べき」「～でなきゃ」がどうしても出てしまう。全てを外してベクトルを内に向けてはじめて“自分らしく”生きられると思うので、本来のその人に向き合うためにお断りしているんです。

## ベクトルを 内に向ける

ベクトルを内側に向けさせないと、本当のその人が出てこない。「あなたのために映画をえらびます。」はその人本来の姿を探る中で最適な映画を絞っていく。何故その5本が選ばれたのか、その映画を実際に観るまでがイベント、いや、もしかしたら観た後もイベントは続いているのかも。

インタビュー中、キノ・イグルーで活動するまでの有坂さんの成功体験について伺った。

有坂——サッカーをやっていた学生時代、チームメイトとはモチベーションの差を感じていて。公園ランニング3週のトレーニングがあったんです。

でも、監督がいない時はみんな1周しか走らない。ただ自分は絶対3周走り続けていて。それは自分にとって当たり前だったし。そのうちに、ある同学年の子も3周走るようになって。そしたら最終的に自分たちの代は監督が見ていなくてもみんな3周走らなくなったんです。で、その時わかったのは、見えないけど皆の心の中に本当はそういう情熱があるんだって。奥底に眠っているんだと思う。話していて思い出したことだったけど、この時の体験も自分にとって大事な気づきだったのかもしれない。

目に見えないけどみんなの心にあるなにか、それは情熱かもしれないし、本来の自分の“好き”かもしれない。こうしたいと思っていてもできない何かかもしれない。ならばそこを開放できないか。映画ならできるのでは？かつての自分がそうだったように。

キノ・イグルーは、料理やDJなど「他ジャンル」と「映画」とを化学反応させることで映画の裾野を広げつつ、映画の楽しみ方を新しく提案してきた。それは一見、“新しいスタイルで映画上映をした”だけのようにも見える。でも本質は、スクリーンと自分の1対1で向き合う時間、自分では選ばない映画と出会う世界の広がり、日常生活で覆い隠された本来の自分を取り戻すための機会を提供してきたともいえる。そしてその時の記憶は、映画と共に思い出になる。心を自由に、本来の自分を、映画と共に。そういう時間を、映画を通して全国に届けてきたのがキノ・イグルーなのだろう。

サッカーをやればプロ入団、映画にハマればそれを仕事に。

今の有坂壘が誕生するまでには、子どもの「好き」を応援する親の存在も大きなものなのでは。インタビューの最後は有坂さんの育った環境についてだった。

有坂——母親は子ども3人を一人で育てくれ、好きなことは思いっきりやらしてくれる人だった。僕たちの「純度100%の好き」を伸ばしてくれたと思っている。

ファミコンが好きになったことがあって、思いっきりやらせてくれた結果、ファミコンで全国大会に出場したこともあって。もちろんサッカーも思いっきりやらせてくれて。環境があればこそだと思う。

## 純度100%の「好き」

有坂家の3兄弟はアパレル、サッカー、映画とそれぞれのフィールドで“好き”を活かして活躍している。「純度100%の好き」を伸ばしたお母さん自身のことも気になった。

有坂——僕が20歳の時に母は再婚することになって。で、みんなでご飯を食べようと。新しい父には敬語は使わず会おうと思って。そしたら、当日何も話していなかったのに兄弟みんな同じ気持ちで。

そんな母がライブハウスでボーカルをするようになって。初めて行った母のライブで、観客の立場になってみたら、生まれてはじめて“母の顔”をちゃんと見たと思いました。すごかったのが、ボーダーの服を着て登場して。何歌うのかと思ったら、広末涼子の『Majiで恋する5秒前』ですよ(笑)。あの曲の歌い出し、知ってます？「ボーダーのTシャツの～♪」って(笑)。純度100%で好きなことをする同じ血が自分にも流れていると思いました。

純度100%の好き、あなたにはありますか？この秋は映画を観ながら、自分は何に興味があって、何が嫌いなのか、そして何に心動かされるのか、見つめてみる時間にしてはいかがでしょうか。ベクトルを内に向けて。

映画好きな、あるふたりの青年の一步が「Kino Iglu」となったように、自分だけの“好き”があなただけの新しい一步を踏み出すヒントになるかもしれません。